
ボージャー

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボージャー

【Nコード】

N1838W

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

ボージャー・無人宇宙探索機。1977年に打ち上げられ、今尚地球にデータを送り続け、2015年に太陽系外探査に踏み出す、地球から最も遠い人工物体である。現在データ受信に13時間以上かかるが、ボージャー自体が地球に戻ることはない。

河埜真昼・駆け出しの建築士。年上の人に出会って、恋をする。

ブローグ

丘の上に腰かけて、カルタゴの港を見下ろしながら、届いたメールを思い出す。

―大学に入って、二度目の桜を見ました。

ごめんね、伊織。返事はしないけど、もうじき帰る。始めなかった恋は、そこからスタートさせよう。もしも伊織があたしをあのままで覚えてくれるのならば、少しだけの修正を加えながら。そして会わなかった間に成長しただろう伊織を、あたしの記憶とすり合わせながら。

あの頃の伊織は、あたしが捨てたいあたしだった。とても可愛くて、それだけにせつない。

あたしもあんな風だったんだろうか？ センセイの目に留まりたくて、あたしを見てくれるんなら無茶だってしようと思った。それが自分のやりたいことでなくとも、センセイの傍に居ようと思った。だから伊織を振り回したのは、自分を見てみたかったに過ぎない。ごめんね、ありがとう。

聞き取れない言語の飛び交う街で、何度も振り返った。ほっそりした体格の少年を見るたび、大きく手を広げたまま前髪を掻き揚げる仕草を見るたび、まだ大人になりきらない声を聞くと、伊織じゃないかと顔を見る。

そんな筈はない。居場所を告げずに来たのは、伊織を待たせたくないからだ。伊織と寝なかったのは、伊織の気を済ませたくなかったから。

一方で突き放して、一方で繋ぎ止めようとしている。なんて矛盾。

帰るよ、伊織。

日本ではもう、母があたしの部屋を整え始めているだろう。

眼を覚ませ

二十五の歳に百年の恋をした。

建築学部が設計事務所のアルバイトをして、卒業と同時にそこに就職するなんていうのは珍しい話でもなく、中堅よりもかなり小さいその社風は、良くも悪くもオープンだった。「河埜さん」と呼ばれるよりも「真昼ちゃん」と呼ばれる場所は居心地が良いし、大学を卒業したばかりの小娘をベテランが可愛がっておだててくれるので、世間を舐めていたあたしの人生は甘い。

高校生の頃からお世話になっていたハーフムーンのマスターは、窘めるでもなく嗤うでもなく、あたしの順調な生活の話を聞いてくれている。少々の努力と幸運、それが全て自分の力だという気するのは、世間知らずだからだ。学生時代の友人が全員建築に携わる仕事につけたわけでもなく、逆に有名な事務所で丁稚奉公のような下働きに甘んじる知り合いもいたのだ。

積算とお茶汲みがメインの仕事で、時々一般家屋のプランニング。あたしに割り振られるのはそれくらい。勿論必要な仕事ではあるし、駆け出しの建築士にそれ以上は荷が重い。男ばかりが多い職場で、当時まだ長かった髪を一つに括った私は、CADとすっかり仲良しだった。

小柄で気の強い私を面白がって、酒の席に誘われることも多く、時間は充足する。一級建築士を目指さなくても、毎日楽しく過ぎて行く。

居心地の良い場所と充足した時間に慣れて、飽きが出始めた頃だ。

「ずいぶん可愛らしい嬢ちゃんがいるなあ」

センセイの第一印象は、小馬鹿にしたような笑い。

「住宅の打ち合わせに行く時はミニスカートで、旦那さんにアピールしとくと良いかも知れないな」

「結構なセクシュアル・ハラスメントを有難うございます。大丈夫です、私のプランニングを気に入ってくださいる方もいらっしやいますから」

「ふうん？女の武器だって、武器は武器だぞ。使えるんなら使えばいいのに」

センセイはあたしの勤め先の代表が若い頃修行した事務所の先輩で、別に名のある建築士じゃない。ただ独立事務所を構えているだけで、私の勤め先に顔を出すのも、手が足りない時の助っ人としてだ。和洋折衷な建物が得意で、住宅街に不思議に溶け込むビルを、いくつか設計していた。

「自分のお家を建てるためのスキルか、嬢ちゃん」

CADに向かうあたしの脇に、センセイが座る。社外の人間が勝手な場所に座るというのも無礼な話だけれど、彼の協力を仰いだスタッフが他出中で暇だったのだと思う。

「嬢ちゃんは止していただけですか。河埜です」

「おっと失礼。可愛い顔してるのに、言うことは言うんだ」

センセイは偽悪的に笑い、それが似合う顔立ちでもあった。

「坂口に聞いたんだ、面白いプランニングする子が入ったって。こんなに小さい子だと思ってなかった」

「平均身長はあります」

「ふうん、とセンセイは面白そうに言う。

「夢も平均でお嫁さんか？」

あてがわれた仕事に満足していたあたしに、揺さぶりをかけて遊ばうと思っただけでも知れない。負けず嫌いで、反発したくなるあたしの性格を見抜いたのか。

「センセイ、真昼ちゃんに余計なこと吹き込まないでよ。積算してもらえなくなっちゃう」

「人材つてのは育ってこそだろ」

「社内の仕事のプロって意味では、真昼ちゃんは優秀ですよ」

「建築士には現場を見せなきゃ、育たないだろうよ」

CADの操作をしながら、真横で交わされる会話に耳を傾けていた。センセイは私の可能性について話しているのだ。

社内でCADを操作するのは必要な仕事だし、積算もお茶汲みも嫌いじゃない。勉強してきたことを忘れなければ、設計も工事監理もできる筈だけれど、あたしは現場には出されない。今の仕事だつて、続けようと思えば一生続けることはできる。

もしかしたら、いつか専業主婦になろうと思うかも知れない。卒業してから二年あまり、熟練のみで満足していたあたしの首に押し付けられた氷だった。

走るしかない

「あたし、ぬるま湯なのかなあ」

「まーちゃんがそうだと思うんなら、そうじゃない？」

ハーフムーンのカウンターの上には、チョコレートとエンシェント・エイジ。友達とわいわい騒ぐ時は、ここには来ない。

「仕事に不満があつたわけでもないのに、なんだか面白くない」

「プライドに障った？」

「そう、なのかなあ。そうかも」

そう口に出した瞬間に、翌年度の一級建築士試験で一発合格してやろうと心に決めていた。あたしだって、何かを目指せる。嬢ちゃんなんて蔑称じみた呼びかけ方は、許せない。

仕事が終わってから学校に通う日々が始まった。ベテランだらけの会社の中で、ペーペーのあたしの位置はあくまでも「使いつ走り」であつて、総務・経理に携わらないながらも内勤プラスアルファだ。現場経験の少ないあたしの学力を底上げするために、いろいろと覚えなくてはならないことも多い。

そして応援してくれると思つていた会社の人たちは、意外に協力してくれなかった。考えてみれば当然で、会社は資格保持者に不自由してはなかったのだ。あたしにあてがわれていた仕事は、「どうしてもその人でなくてはいけない」ものではなかったし、熟練はしても「替えのきく」存在だということに、その時にやっと気がついた。

今までの短い人生の中で、こんなに一生懸命勉強したことがあつたろうかと考えながら、意地と二人連れで勉強する。

「まーちゃん、最近遊んでないでしょう？」

「そうでもないよ。ちゃんと飲んでるし」

大学を卒業すると同時に実家を出たあたしの、仕事に関係なく話せる年上の相手はマスターだけだ。

「まーちゃんはムキになるからなあ。程々が無い」

マスターはのんびりした口調でそう言い、レコードを替えた。

次にセンセイと口を利いたのは、残暑というよりはまだ夏の続きのような九月だった。

「お、嬢ちゃんは頑張ってますねえ」

「河埜です。それにまだ、定時前です」

「そう突っ張るなよ。それでなくとも、余計なこと吹き込んだって怒られてんだ、俺」

センセイは笑いながら、あたしの肩に手をかけた。

「アイドルが、最近つきあいが悪いってさ。俺はにつこりお茶汲みより、野心の見える女の方が好きだけどなあ」

「野心の見える女」の言葉のイメージに、何かを思い描いたあたしが世間知らずなのだと、自覚はしていた。職業の第一目的は、「食う」ことにある。あたしの父は不動産業の会社を経営しており、あたしが住んでいるのは、所有しているが販売の目処のつかないマンションの部屋だった。

もちろん、その部屋の買い手が決定すれば、あたしは他に移り住まなくてはならない。父はあたしの実父ではあるが、母と入籍したのはあたしが高校を卒業した頃で、まあ有り勝ちではあるが、腹の違う兄が会社を継ぐことになっていた。

父が先妻と別れてからずいぶん経っていたらしいが、口さがない親族から母を守るために、時間と労力を使ったことはわかる。一緒に暮らし始めてからの睦まじさは、娘の私から見ても微笑ましいものだった。しかし実父とはいえ、もう育ってしまったあたしにとって、新しい家庭は居心地の良いものではなく、大学卒業まで付き

合って、お役御免にしてもらったのだ。

つまり、あたしは経済的には苦労知らずのお嬢ちゃんで、母がうるさくないのを幸いに、高校生の分際でバーボンの味を覚えるような、好き勝手な行動をしていたのだ。自覚し始めていた分、センチの「嬢ちゃん」に余計な反応をしたのかも知れない。

世間知らずで我儘で、会社の中でも甘やかされて、そのままの場所にとどまりたいと思えば、いつまでもいられる場所を与えられている。それが自分の手柄ではないのだと自覚したのは、センチの言う「嬢ちゃん」の一言だ。

一人前に見られたい。自分が許される場所だけではなく、自分が勝ち得たもので、自分を許せる場所を作りたい。

「苦労して一級をとっても、真昼ちゃんの仕事はあんまり変わらないよ」

会社の代表は申し訳なさそうに、けれどきつぱりそう言った。それは理解していたことで、あたしに求められている「使いつ走り」を請け負う人間がいなければ、結局一番実績のないあたしの仕事は、なんら変わることはない。

「一級に合格してから、考えます。今は勉強させてください」
走るしかない。

指し示す指

走り続けた先に何かがあるのか、スピードに乗っているうちは気にならないものだ。年末に向けて力が緩んだ時、何の気まぐれか、センセイにお酒に誘われた。超が付く一流ホテルの、大正時代にアメリカから呼ばれた建築家の面影を残すバーで、あたしみたいな小娘は場違いにキョロキョロしていた。

自分の仕事用のカジュアルなパンツスーツや緩くウェーブをかけた長い髪が、やけに浮ついて見えるのではないかと、そればかりが気になった。センセイはゆったりと座り、あたしの落ち着かない態度を楽しんでいるようだった。

綺麗な色のカクテルを頼んでもらって、やっと店の中の気配を楽しみむ余裕ができた時に、センセイが言った言葉が、あたしのそれからの指針になった。

「すごいだろう。なくなっちまった物を偲ぶ空間ができるほど、誰かの記憶に残る建物があつたんだ。ただの容れ物としての記憶じゃないぞ」

その建物は、何度も写真で見た。大正時代に建てられたにも拘わらず、全館スチーム暖房だったという。関東大震災にビクともせず、戦後はGHQに接收されて補修工事を受けて尚、優美さを損なわなかった。確かに容れ物としてだけではなく、堂々たる建物の記憶だ。

「建築家つてのは、どんな小さい建物でも何か遺せるんだよな。俺も一生に一度でいいから、自分にしか建てられないものを建てたい」草臥れかけたオヤジの寝言だと思って聞け、そう言いながら、センセイは片頬だけで笑った。

「嬢ちゃんにも、それができる可能性があるわけだ。捨てちまうのは惜しくないか？」

惜しいです、と答えたあたしの声は、小さかった。

「俺は、可能性を持つヤツが好きなんだ。坂口の事務所だって、自分が動けばまわりも変わるだろう」

一級を取得しても立場は変わらないと言われたことは、敢えて言わなかった。センセイは満足そうにアルコールを口に運び、あたしもそんな場所でバーボンに切り替える勇氣はなく、ただ内装を眺めるだけだ。

それだけのことなのに、センセイはあたしの奥に何かを残したらしい。意地で始めた勉強に、明確な目的ができた。

あたしも、誰かの記憶に残るものを建てる。

年が明けてから会ったセンセイは、あたしを嬢ちゃんと呼ばずに、河埜と呼んだ。敬称をつけないところが、センセイらしい。

「この前の三階建てのプランニング、見たぞ。使い勝手は良さそうだったけどなあ」

「施主も納得してくれたんですけど、施主のご両親が反対で」

狭い敷地だったので部屋のドアはつけず、通路を共有スペースにして、入口の角度で個室を独立させていた。

「ああ、年配者は自分の価値観を譲りたがらないからな。でも、良いアイデアだった」

センセイが頻繁に出入りしていたのは、郊外の土地持ちが自分の土地にまとめて住宅を建て、一区画を小規模な街にして売り出そうとしていたからだ。ある程度のイメージで揃え、閑静な住宅地の雰囲気を持たせれば、その一角に住むことがステイタスになる。

センセイは私の勤め先よりも小回りの利く小さな事務所だし、器用にイメージを作ることができる。

「大所帯は性に合わないんだ。死ぬまで食えるだけで充分だからな」

彼の「野心」の中に、金儲けは入っていないらしい。

あたしの仕事は相変わらず単調に内勤がメインだ。自分のために動く時間を捻りだすために、夜の外出はすいぶん減っていたし、学生時代の友人たちとの連絡も減っていた。

ハーフムーンのマスターからは「顔色は良くないけど、まーちゃんには、誰が何を言っても無駄だから」と言われた。

「パパの会社のビルを建て替える時は、真昼に設計してもらうか」
両親はのんびりとそんなことを言う。

「そんな先の話じゃなくて、合格したらビルの計画のあるオーナーを紹介して。話さえ通してもらえば、自分で営業掛けるから」

あたしの言葉が正確に伝わっていたかどうかは、わからない。父は頼もしいなと笑った。

センセイは、父と同年代だった。家庭のある人だと思い込んでいたのだけれど、独身なのだと知ったのは会わなくなってからだ。つまり彼があたしに、そう思い込ませていたのだ。

それについて、今更どうこう言おうとは思わない。若い女が一番に考えるようなことをシャットアウトする周到さが、彼の年齢には備わっていたのだと思うだけだ。少なくとも彼が私に興味を持ったのは、私を肉体的にどうしようという欲望ではなかった筈だ。知りようはないが、彼は少なくともそれに不自由するタイプではないように思う。

受話器越しの声

センセイに惹かれていくのに、時間はかからなかった。あたしはあたしを引き上げようとするものを求めていたし、会社でもプライベートでも、それを与えてくれる人はいない。

だからそれがセンセイからしか得られないと気がついたときには、あたしの感情は引き返せない場所にいた。褒められるために会いたくて、センセイが自分の事務所に顔を見せる人を心待ちにした。

時々夕方から夜にかけての時間に訪れるセンセイが、また誘ってくれるのではないかとPCに向かいながら待つ。

待っても、誘いの言葉は来なかったけれど。

「河埜、最近はプランニングしてないのか」

「今、一般住宅の依頼が薄くて。そうすると、あたしみたいなペーパーには」

「坂口も、もうすこし河埜を活用してもいいのにな」

それだけのやりとりで、あたしの寝不足や夜の遊び時間が減ったことは報われた。同年代の男ならば自分から押し倒してしまうあたしが、まったくの生娘のように、自分からの誘いの言葉を吐けない。「センセイ、真昼ちゃんにちょっかい出さないでよ。アイドルなんだから」

「仕事場に癒しを求めるより、可愛子ちゃんのスキルアップに協力してやれや」

「真昼ちゃんは真昼ちゃんの仕事を全うしてるんだから、それ以外のことは趣味の範囲でしょ」

事務所の古い先輩たちの言葉に対する、歯軋りするような悔しさは、センセイがあたしの肩に乗せる手で緩和される。

「やだね、こいつらは若い才能が怖いってさ」

程なくセンセイの協力を仰ぐプロジェクトは着工し、センセイが事務所に顔を出す機会は減った。春に入ろうとしている時期で、桜の蕾がほのかに色付いてくる頃だ。

ハーフムーンのカウンターで、サッチモの「愛はすべてを超えて」を聴きながら、センセイの事務所に電話した。事務所の中になんて、いない時間のはずだった。

「はい」

抑え気味な声を聞いて、あたしの声が出なくなった。受話器越しに心配を探っていたらしいセンセイが、もっと抑えた声で驚くような言葉を発した。

「・・・河埜か」

何故、あたしだと思ったのだろう。

「そうです。こんな時間に事務所にいると、思わなかったから」

「いるさ、貧乏暇なしだからな。おまえさんは酒の場所だろう、嬢ちゃん？」

普段と同じテンポで喋るセンセイは、何故電話してきたのかとは、訊かなかった。

夜遅くになると、センセイに電話しなくなった。電話は繋がることもあったし、繋がらないこともあった。センセイの事務所を訪れたことはないのだけれど、繋がらない時は、灯りの消えた小さい事務所の中で呼び出し音が響くイメージを描いた。

何度かのコールの後、低い声で「はい」と出るセンセイが、今抱えている物件は知らない。センセイはあたしの連絡先など知ろうとしなかったけれど、何故電話するのも聞こうとしなかった。

センセイに提供する話題もなく電話をして、低い声でぽつりぽつりと話される歴史の話なんかを聞く。灯りを絞った自分の部屋で、ハーフムーンのカウンターで。

「勉強は進んでるのか」

「ちょっと疲れ気味で。でも、大丈夫です」

「根なんか詰めても、頭に入らないぞ」

気まぐれに誘われる休みの日の散歩は、ただただ歩くだけのもので、食事を一緒にすることもない。明治時代の建築物を見ることが、冬枯れた庭園を歩くことは、センセイにとってどういう時間だったんだろう。

「たまには、食事していきませんか」

「いや、家で晩酌するんだ」

夕方の駅の雑踏の中で、振り向きもせずに改札を抜けるセンセイのコートは、美しい鼠色だった。

気がつくと冬は終わり、桜の季節になっていた。花の中を散歩しようとして、享保の改革の一環として造成された公園をセンセイと歩いた。公園の中の重要文化財である建物が、明治の建築だとセンセイは言った。

「建物も可哀想にな。人間が使ってこそその容れ物だろうに」

冬の厚いコートではなくなっていた。センセイの年齢なりに水分の少ない肌が、強い風にさらに乾燥する。

「河埜は、どんな人間を容れるものを造りたいんだ」

それへの返事は、いまだに見つかからない。

手も触れず、感情を口にもすることもせず、あたしとセンセイは電話の会話と、思い出したような散歩で繋がっていた。センセイが欲しいとは、言うてはいけないことだ。センセイがあたしに私生活を見せないのは、見せたくないからなのだから。乗換駅の改札口で、今度はいつ会えるのだと聞くことも、あたしにはできなかった。

三カ月後には試験があり、それに合格すれば、秋に控えた試験のために、更に努力しなくてはならない。それをないがしろにすれば、センセイのあたしへの興味は、まったくないものになるだろう。

それでも夜中に電話をすれば、先生は低い声であたしの名を確認する。まるで、あたしが電話をすることを、あらかじめ知っていたかのように。

すり替わる目的

「なんだか、最近イキオイがないねえ」

ハーフムーンのカウンターで、繋がらない電話に溜息を吐いたとき、マスターに声をかけられた。

「欲しいものがあるの」

「力ずくでもぎ取るまーちゃんも、手に入らないものはあるだろうさ」

事情なんて何も知らないマスターが、どきつとすることを言う。

あたしがセンセイに連絡する手段は、事務所に電話をすることだ。センセイは私用の携帯電話を持っていないし、仕事用のものは、自分の用事が済むと電源を切ってしまう。

「そうそう火急の用事ってのは、ないもんだよ。常に電話で縛られてる感じは、いやなんだ」

「おうちの人は？」

「別に、何もないから」

センセイは妻帯者だと思い込んでいたので、何もないというのは、家庭からは連絡は来ないという意味だと思っていた。

あたしの仕事とあたしの勉強。掴もうとする手の先にあるのは、あたし自身のプライドだった筈だ。目的が「センセイに褒められるため」にすりかわったのは、いつなんだろう。受話器越しのセンセイの低い声は、あたしを呼び寄せる魔法のようだ。

住宅のプランニングをするたび、センセイが事務所に来ないかと願った。時々会社の誰かがセンセイと会った話をすると、あたしもその仕事に関われないものだろうかと考えた。

一生懸命勉強して、試験に合格すれば、センセイは褒めてくれる

だろうか。懐いてきた子供を気まぐれに散歩に誘うのではなく、あたしをあたしとして見てくれるだろうか。

あたしのプライドは、センセイに傾いていく心よりも、安いものだったのだ。

資格を取ったとしても、あたしの仕事は変わらないと明言されているのだ。この会社で、あたしが求められていることと、センセイに見てもらいたいものが違う。仕事を終えて帰宅し、一人でテキストを紐解く時や、予備校に行くために電車に乗っている時、ふと立ち止まる。

あたしは、何をしたかったんだっけ？誰かの記憶の一部となるような建物は、誰のために建てたいんだろう。

悩んでいる時間はなかった。突然たてこんだ仕事が入り、会社を出る時間が遅くなったのと、受験勉強が佳境に入ったのはほぼ同時だった。一日中パソコンの前に座って、CADとにらめっこし、積算ソフトを動かして、目をチカチカさせながら帰宅する。

ちよつと時間が空いたときにハーフムーンに顔を出すのが、楽しみらしい楽しみで、出勤用のパンツスーツはアイロン掛けが億劫で、何も言われないのを良いことに、カーゴパンツが日常着になった。

考えてみれば、商談以外で外出する人は全員そんな格好で、あたしだけが内勤プラスアルファ程度の仕事だから、「汚れても良い服装」ではなかったわけなのだ。経理や総務の担当がきちんとした服装だったので、「女の子はビジネス服」に右へ倣えして、それが当然だと思っていたのだけれど、職種が違うのだから、他の建築士と同じ格好くらいいい。いい。

センセイは夜中の電話に出てくれはしていたけれど、散歩に誘ってくれもせず、声だけの人になった時期だった。

何故、私から誘うことが出来なかったのだろう。焦がれるほどに会いたくて、会えない分だけ気持ちさがセンセイに向く。会っても、触れるわけでもないのに。

5月の連休はあつという間に終わり、6月の模擬試験の後、7月には本試験だ。それに受ければ、10月には製図の試験が控えている。

ハーフムーンのカウンターから、センセイに電話する。サッチモの声はしゃがれて、あたしの前にはバーボンとチョコレート。これが本日の夜のカロリー源で、不健康なことは重々承知だ。

「河埜か。勉強は進んでるのか」

「悔いの残る事は、したくないです」

「痩せたって聞いたぞ。無理はするなよ、来年もある」

センセイの声は、やはり低く抑えられていた。

会いたいんです。センセイに会って、頑張れよと肩を小突かれれば、最後の無理が利きそうなんです。

そう言いたいのに、言葉は出ない。

「ま、他人の言葉がどうこうって嬢ちゃんじゃないな。がんばれ」

「ウチの事務所に、最近見えませんね」

「今、俺は俺の仕事で手一杯だ。余所様の助っ人をする余裕がない。坂口よろしくな」

来てください、あたしに直接声をかけるために。

「ま、暇が出来たら、顔出すわ。河埜もちょっとは成長するだろうし」

焼き付けたい

センセイの事務所の住所は、知りたくなかった。自分の職場で容易く調べられることだから、それを目にしないように気をつけていた。

見てしまえばきつと、覚えてしまう。

覚えてしまえば、電話の変わりにセンセイの事務所の前を歩くようになるだろう。それは自分ながらに、とても浅ましく感じる。あたしがしたいのは、そんなことじゃない。

あたしが帰宅した後に、センセイがふらりと社に訪れたことがあったらしい。

「真昼ちゃんも忙しがってないで、あと十分遅ければ、一緒に飲みに行けたのに」

夜の誘いに乗らなくなっていたあたしは、自分の仕事が終わるとすぐに帰宅するようになっていたのだ。

「最近の真昼ちゃん、つきあいが悪過ぎ。だいじょーぶ、別に試験に通らなくたって失業するんじゃないんだから」

失業！それを賭けて立てた目標ならば、どんなにか良かっただろう！あたしの差し伸べた指の先にあるのは、野心や自分の満足よりも「センセイに褒められたい」がある。あたしはこんなにも、主体性の無い女だったのだろうか？

好きです。愛しています。

そんな言葉は、感情の前で無力だ。か細い電話の電波だけで繋がるセンセイに、確かな物なんか何もない。あたしは「勝手に懷いている子供」に他ならない。センセイの言葉に煽られ、向く方向を指示され、そして今、自分の立っている場所がわからない。

ああ、勉強をしなくてはならない。あたしが見せることが出来る

のは、センセイに示された道を間違いなく歩くことだけだ。

……それは、何のためだったろうか。

「まーちゃん、この頃女っぽくなったなあ」

氷をピックで砕きながら、マスターが言う。

「意のままにならないことがあると、憂いが顔に出るんだよね。今までのまーちゃんでは、考えられなかったけど。仕事？」

「ん、まあね。あたしだって、それなりに物思うことはあるわけよ」
マスターは大人だから、それ以上話を聞きだそうとはしない。あたしも、誰にも何もいう気はなかった。不倫だとか片想いだとか、そんな言葉を自分に当て嵌めたくはない。

自分の長い髪を、指にくるくると巻きつける。学科の試験に合格したら、女を主張しているような、この髪を切ろう。

センセイと直接言葉を交わす機会はなかなか訪れず、試験のための勉強は佳境で、ベッドの上でテキストを枕に眠る日々が続く。

「真昼ちゃん、これ頼むね」

その一言で渡される図面と仕様書で、頭を仕事モードに切り替えなくてはならない。

設計と監理もしたいんです。自身のスキルアップ後にしか、それは言い出せない気がする。しかも、あたし以外に「使いつ走り」が存在すると仮定しての話だ。目の前の目標をクリアしたら、次は自分の力で壁を薙ぎ倒さなくてはならない。

何かに追い立てられ、後ろを振り向く余裕はないのに、目の前の風景が見えない。放り投げてしまおうか。放り投げてでも失う物は一つないのだ。仕事も私的な生活も、何一つ不自由しない。当たり前、楽しく気ままに生活して行けるのだ。

放り投げたら、センセイはあたしに興味を持たなくなるだろうか？深夜に電話しても、低い声で話してくれたりしなくなるだろうか。

センセイがあたしに興味を持たなくなったとしても、あたしは何も失う物などない。それなのに、何がこんなに苦しいんだろう。指先すら触れず、あたしからの連絡に受話器越しの応え。センセイの生活に入り込みたいわけじゃない、あたしを見て欲しいだけ。

河埜真昼はここにいる。

それだけをセンセイに焼き付けたい。今までこんなに狂おしい欲求を、他人に抱いたことはなかった。

六月の終わりの模擬試験で、自分のレベルは合格圏内だと安心する。ここで手を抜けば、確実に脱落する。ギリギリになって答えを見いだせなくても、脱落はプライドが許さない。

あたしは知らなかったが、その頃「真昼ちゃんを構うな」が職場での合言葉だったらしい。応援をしてくれているとは思わなかったが、気を遣ってもらっていることに気がつかないほど、あたしは甘やかされていた。

加速する心

学科試験の二週間前に、センセイと会う機会があった。

「確かに、少し痩せたか」

「もう、追い込みですから。でも、自信はあります」

「頼もしいな」

古い大学の美術館の、企画展だけに開放される建物は、スクラッチタイルが重厚さを見せている。センセイは夏の開襟シャツを着て、あたしは木綿のワンピースを着ていた。外から見れば、仲の良い父娘に見えたかも知れない。

「合格したら、お祝いしてくれますか」

「酒の一杯くらいなら、奢るさ。坂口にもそう言っておこう」

センセイにさえ祝ってもらえれば、あたしはそれで報われるのだ。夏の濃い影を踏みながら、先生の横を歩く。

今あたしがセンセイに、センセイが欲しいのだと叫んだら、どうなるのだろう。きっと、何もない。どうにもならない。それどころか、横を歩く機会を失うことになる。

駅の改札口を抜けると、センセイは振り返った。

「河埜なら、掴もうと思ったものは掴める筈だ。がんばれ」

その言葉で、あたしは満たされてしまう。あたしの感情の脆弱さは、センセイが作り出したものだ。もしもセンセイが「ここで死んでみせろ」と言えば、あたしは鞆の中のデザインナイフで、頸動脈を切ってみせたかも知れない。

センセイがあたしに、そんなことを言う必要はないし、それが自分の妄想だとわかっていても、あたしはその光景をうっとり夢見た。

七月の終わりの学科試験は手応えがあり、九月の発表までジタバタせずに待つしかない。その間に製図の勉強を進めなくてはならないので、そのための学校に通う。

仕事で渡される、積算のための設計資料よりも大きな建物を細かく計算して、短時間で図面を起こさなくてはならない。普段自分で起こす図面は、せいぜいが一般住宅で、それすらもベテランにチェックしてもらっていたのだ。自分の出来ることを増やすのに、こんなに苦労したことはなかった。

忙しい気分で夏が終わって二十六歳になり、学科試験合格の知らせの連絡を受けたのは、九月の終わりだ。センセイとは、その間一度も会わなかった。

正確に言えば、勤め先に顔を出したセンセイと挨拶を交わすことはあった。センセイは代表の古い友人だし、連れ立って飲みに出ることも多い。

あたしが夜中に電話することを、センセイは誰にも話したりはしなかった。あくまでも取引先の女の子をからかって遊ぶというスタンスで、他の人に話しかけるようにあたしにも話しかける。

その指で、あたしの鎖骨をなぞってくれたら良いのに。

あたしがそう考えていることを、センセイは気付いてていたろうか。気付かぬ筈はない。センセイは、気が付かない振りを通していただけだ。ぴんと強く張った予防線を、あたしに切ることはできない。それとも、あたしが切りたくなかったのだろうか。

それは、今になってもわからない。

一発合格するということは、自分で自分に科したことから、何が何でもやり遂げなくてはならない。傍目から見たあたしは、ずいぶんぎすぎすと余裕のない様子だったろう。両親ですら、もう試験の話題には触れず、無理をするとも言わなかった。

ハーフムーンのマスターは、時々奢りだと言って、カウンターの下に隠してある自分用のとっておきを振舞ってくれた。

「まさか、今日も夕食がチーズだけなんじゃないだろうね」

「冷蔵庫のニンジンは齧った。明日の昼は、上棟式のお弁当が出るから、大丈夫」

マスターはアメリカ人のように、両手を広げて呆れてみせた。

スピーカーからジャッキー・マクリーンの「レフト・アローン」が流れる。すすり泣くようなサックスだと思う。

センセイ、あたしはどこに向けて走っているのでしょうか。

あたしのプライドは、何のためにあったのでしょうか。

電話のコールを何度か聞き、携帯電話のフラップを閉じて溜息を吐く。マスターは、黙ってグラスを磨いていた。

動き出したい

十月の終わりの製図試験で、一息つく。結果は十二月になるまで出ないが、やれることはすべてやったと、身体中から力が抜けた。

「真昼ちゃん、お疲れさん」

会社の人たちは、優しく労ってくれる。その時になってようやく、見守られていたことに気がついた。風通しの良い、あたしの居場所がそこにあり、ここで自由に息をしていくことはできる。

「試験はどうだった？」

「やるだけの事は終わりました。結果が出なければ、来年があります」

あたしは部屋で、自分のベッドに寄りかかっていた。センセイの低い声は、受話器越しの耳元に届き、あたしを揺さぶる。揺さぶられたくて電話をしているみたいだ、と自分の中で呆れ声が聞こえる。けして、あたしのモノにはならない人。そう理解した上で、執着しているのだ。

「約束通り、一杯奢ってやるよ」

「落ちるかも知れませんが」

「そうしたら、来年の合格の前祝いだ」

何日か後の夕方に、勤め先に顔を見せたセンセイは、「河埜を借りる」と宣言して、あたしを連れ出した。青山墓地に程近い古びた建物のビストロで、内装に古い民家の建材を使っていた。煤竹色の天井や、おそらく床柱に使われていたであろう、美しく磨かれた柱が懐かしくも美しい。

「古い農家を解体した時に、譲り受けたんだ。こんな立派な素材を生かすよりも、新しい建物がいいんだとき。リフォームの提案もしたんだがな」

「このお店も先生の物件ですか？」

「残念ながら、俺は素材を提供しただけだ。解体した場所に、システムキッチンとユニットバスをつけた家を建てた」

センセイは少しだけ悔しそうだった。

「建築家と建築士ってのは、違うな」

センセイは言う。あたしも、そう思う。

「河埜が何を目指そうが、見ててやる。坂口の事務所に居ても、あそこを出ても」

出てしまえば、センセイとの儚い繋がりは、切れてしまう。

「見ていてくれるだけですか」

「手伝いはできない。俺の古臭いセンスで、教えられることはない」
繋がりが切れてしまえば、あたしは何を見ながら進まなくてはならないのか。

街にクリスマスの飾りが増えた頃、一人の男と知り合った。

「サカグチ・アーキテクツの人だよな？俺の会社、向かい側のビルにあるんだ」

駅で話しかけられた後、しばらくしてから一緒に飲みに行き、三度目に二人で会った時に、ベッドを共にした。別に男の肌に触れたかったわけじゃない。ただの成り行きだ。次に会ったときも当然のように誘われ、その次に会った時には、彼はあたしの姓ではなく、名を呼んだ。

よく知りもしない男に名を呼ばれる違和感と、少しも楽しくないベッドのこと。楽しくはなくても、人間の肌は暖かい。それに触れたかった。

何かに飢えていただけかも知れない。彼とは何度か会って、そのまま距離が離れていった。あたしが楽しまない程度に、彼も楽しんでいなかったのだと、気がついた。気がついたからといって、罪悪

感も湧かなかったけれども。

そうして発表の日が来た。あたしは自分で驚くほど落ち着いてセンターのホームページを開き、合格を確認した。一緒にパソコンを覗き込んだ同僚たちの、祝いの言葉に戸惑ったくらいだ。

「合格者一割の中に入った割に、クールじゃないか」

代表があたしの頭を小突く。

「なんて言うか、呆然としてるんです。でも、皆さん合格されてるんですから」

「他の奴らは二年計画の上に、事務所のバックアップ付だった。独力で、よくやったな」

目の前の霧が晴れていくに従って、徐々に動き出すまわりの景色がある。

「お祝い、してください。代表の奢りで」

両親に電話で連絡をすると、祝うから家に帰って来いと返事があった。週末に訪れることを約束し、一日の仕事をこなした後にハーフムーンに向かう。

「受かったよ、マスター」

「知らせたい人には、知らせた？」

「……これから」

クリップで留めていた髪を広げて、指で梳く。自分を繋ぎとめるものを、切ってしまうなくてはならない。

切ってしまったえなければ、あたしは。

どこまで続くんだろう

「合格しました」

「そうか」

それだけの報告だった。祝いの言葉も、労いの言葉もなかった。

「自由になるな」

そんな言葉を貰った。

「自由、ですか」

「そうだ。建物の大きさを、自分が縛らなくてもいい」

実際、大きさを縛らない建物なんて、求められはしないけれども。

「これから、何がしたい？」

問いかけに、息が詰まった。もちろん補佐ではなく、一人前の建築士としての仕事をしたい。目の前の壁を薙ぎ倒すためには、積み上げるべき実績を持たなくてはならない。

誰かの記憶に残る建物を——どんな、建物を？

「あたしは、何をしたらいいんでしょう？」

「バカ。他人に聞くものじゃないだろう。次に待ってるのは、学校の試験よりも遥かに厳しくてシビアだ」

センセイの人生とあたしの人生が、どこかでクロスすることなんて、ない。翌週、髪を切った後に実家に帰り、両親を驚かせた。背の中程まで伸ばし緩やかに波うった髪を、うなじが露わになるほど短く切ると、手持ちの服の半分がお役御免になった。何かを手放した気分ではあったけれども、肩が軽くなったのも確かだ。

鏡の中のあたしは、今迄以上に「河埜真昼」だった。

「どうしたの、まーちゃん。ずいぶんすっきりしちゃったね」

「ん、試験合格祝いつてどこ？似合わない？」

「とっても似合うよ。お嬢さん臭さが抜けて、まーちゃんそのものだ」

ハーフムーンのマスターの感想が、嬉しかった。次にセンセイと会う時、センセイは何と言ってくれるだろう。気がつかないかも知れない。

それでもいい。ただ、センセイの呼吸する音を隣で聞きたい。

正月休みを両親につきあい、温泉旅館で過ごした。

「真昼の肌は、まだ水滴を弾くのねえ」

「ママ、あたしはまだ二十代半ばよ」

「ママが真昼の年には、真昼は生まれてたわ」

詳しい話は知らないけれど、妻帯者だった父は、離婚係争中に母と恋に落ちたらしい。それを不貞の材料に、高額の慰謝料のやりとりがあつたと、聞きもしないのに父方の親戚が教えてくれた。

面倒な恋をしたがるのは、血なのだろうか。

「真昼がおかしな男に引っからないかって、パパが心配してるの。家に帰って来ない？」

「引っかかる時は、どこに居たって無駄じゃない？妻帯者と恋愛して家出した箱入り娘に、言われたくないな」

「あの時はもう、別居してたもの。だから、離婚が済んでないと思っただけだよ」

母には母の苦労や心痛はあつたのだと思う。それでもいつまでも娘のような母は、同居や結婚こそ遅かったが、父にとっても大切にされていた。幼い頃、週末ごとに訪れる父は必ず笑顔で、それは一緒に暮らす今も、変わらない。

センセイは、どんな家庭を持っているのだろうか？炬燵で無口に酒を飲んでいるのか、ソファに寛いで、家の中の誰かと楽しげに会話しているのか。センセイが気を休めた顔を、あたしは見ることで

きない。その考えは、温泉でほとびたあたしの心臓を掴み、背筋を流れていった。

どんなに望んでも、それは得られないのか。センセイがあたしに寛いで見せることは、けしてないのか。

会いたい。もうどれくらい、会っていないんだろう。あの腕に、触れてみたい。あたしの胸に、触れて欲しい。

センセイの指を知らぬまま、どこまでこの感情は、続くんだろう。終わりにするためには、何を目印にしたら良いのだろうか。一度でも望みが叶うのならば、あたしはそれを秘めたまま、満足して終わりにできる気がする。

一度だけ、センセイの素顔を見せて欲しい。

会いたいです。

冬休みを終えて入社すると、知らない男の子がひとり、増えていた。新しい学生アルバイトのように見える。

「真昼ちゃん、CADと積算ソフトのレクチャー頼むよ」

いきなり預けられたその子は、センセイと同じ姓を持っていた。一瞬自分が次のステップに進めるのかと喜んだあたしは、次の言葉で頭を殴られた。

「センセイの甥に当たる子なんだ。一年間ウチで勉強して、センセイの事務所で働くようになる」

センセイの事務所は、基本的にはセンセイが一人で請け負えるものしか扱っていない。仲間同士で人間の融通はあるし、例えば建築模型が必要な場合や躯体積算は外注することができる。

センセイが、自分以外の人間と仕事をしたがる人だとは思えなかった。目の前に立つ男の子は、専門学校を出た二級建築士だという。卒業してから大手のリフォーム会社で、一年半施工管理をしていたらしい。

「なんだ、現場を知っているんなら、あたしよりベテランじゃない」
資格だけでキャリアのないあたしは、後輩の指導にすら猫の手程度だ。

「叔父が、面白い女の子が居るって言ってました。河埜さんのことですね」

「まあ、そうかも。他の人はみんな、事務だから」

センセイとは似ていないが、どこかに血の繋がりをを感じる彼が、隣に立つ。あたしがいくらセンセイの隣に居たいと願っても、叶えられないことなのに、彼はあっさりとその位置に入るのだ。

「木島設計の跡継ぎになるの？」

「いや、仕事辞めて就職先探してたら、叔父が手伝えって言うから羨ましくても妬ましくても、どうしようもない。」

「木島君」

センセイの姓を、いとも簡単そうに口に出す。それはあたしの、特別な言葉だったのに。

甥なんて知らない。一緒にモニタを覗き込みながら、あたしにその位置を譲れと口を衝きそうになる。

声を聞きたくて、コールを繰り返す。センセイ、あたしは髪を切りました。

「ああ、夜中に仕事してると、必ず嬢ちゃんの声聞くような気がする」

「センセイが仕事してる時、あたしは飲んでるってことでしょうか」「イヤガラセみたいなことを言うな。息抜きにはちょうどいいが」違います。センセイが知らない時間も、頻繁に電話をかけているんです。

「甥子さんが入ると、楽になりますね」

「そうだな。少なくとも、任せられるところはあるな。最近はどうも馬力がなくていかん」

「夜中に一人で仕事したり？」

「今にあいつが、代わってくれるさ」

・・・代わる？夜中に電話に出る人が、センセイじゃなくなる？そうしたら、あたしはどこに電話したら良いのだろう？

一年後のあたしが、急に小さくなった。いつか終わらせなくてはならない感情のリミットは、存在するのだ。溢れた感情が、喉の奥から漏れた。

「会いたいんです。センセイに会いたい」

低い声がくつくつと笑う。

「じじいに会ったって、仕方ないだろう。こんな寒い時期に、散歩はしないよ」

「会いたいです」

他の言葉は見つからず、ただ同じ単語を繰り返す。今迄言わなかったそれが、一気に押し寄せてきて、喉の奥の叫びのようだ。

「困った嬢ちゃんだな、おまえさんは。俺は夜中まで働くほど、忙しいんだ」

「申し訳ありません」

「とりあえず、明日の晩まで待て。我儘な客で、希望を出して来ないクセに、プランがなかなか通らん」

翌日の晩に少しだけ時間をくれると言う。センセイの事務所からいくつか離れた駅に向き、「一杯分くらいの時間」の顔を見る。

電話を切ってフラップを閉じ、膝を抱えた。あたしの携帯電話の発信履歴には、センセイの事務所の番号が並ぶ。

喉の奥が鳴る。ただ、会いたいです。

センセイに会うために、服を選ぶようなことはしなかった。見た目だけ美しく装っても、通じない相手なのは知っていた。今のあたしが、何を目安に自分を高めようとしているのか、自分で見当がつかないのだけれど。今のままでは先に進めない焦りが、余計にセンセイに傾いているようにも感じる。

感情に理由をつけるのは、詮無いことだ。理由を見つけたからといって、解消されるものではない。

待ち合わせ場所に現れたセンセイは、いつかの鼠色のコートを着ていた。

「襟足が出たら、却って女臭くなったな」

あたしの髪を見たセンセイの感想だ。

「褒め言葉ですか。喜んでいいんでしょうか」

「褒めてるのかどうかは、わからんよ」

小さな居酒屋のカウンターで、枡に入った酒を口に運ぶセンチの口元には、年齢なりの皺が見える。

「河埜、いくつになった」

「二十六です」

「そうか、俺は五十五だ。後は枯れるしかない」

枯れるということが、どういふことなんだか、あたしには予測ができない。

停滞と進捗と

「義則はどうだ。ちゃんと研修してるか」

甥の話題を口に乗せるセンセイは、保護者然としている。

「真面目ですよ。現場経験もあるし、即戦力ですね」

「河埜はどうだ。ちょっとはやらせて貰ってるのか」

「変わりません。特別に才能があるわけじゃありませんし、ペーパーですしね」

「いつまでペーパーで居るつもりだ？ 熟練とセンスは関係ないだろう」

そこに留まりたくて留まっているわけではないのだ。

「公募のコンペに入賞して、鼻を明かしてやってもいい」

「公募でも、代表の許可は要るでしょう」

「文句の無いデザインなら、出すと言えまい。入賞すれば、事務所の宣伝になるんだから」

最後の一口をくいと呷って、センセイは立ち上がった。

「さ、帰るぞ」

「何故会いたいのか、聞いてくれないんですね」

「聞いたからって、どうもならん。気が済んだなら、帰って明日に備えろ」

こうして張った予防線の向こう側に、センセイは居るのだ。

「センセイは、狡いですね」

「小心なんだ。無鉄砲なことなんか、もうできないんだよ」

センセイは、薄く笑った。

「だから、河埜も余計なことを考えるな」

「余計なこと、なんでしょうか」

「余計なこと、だろう。少なくとも、生産性は無いな」

この感情に、生産性は必要なんだろうか。

「・・・あたしは、どこに行けばいいんでしょう」

「自分で考える。どこに行っても、ずっと見ててやる」

こうして、いつでもセンセイの内側には行けないのだ。この指に触れられることはないのか。

「一晩だけ、一緒に居ていただけないでしょうか」

あたしの声は、たつぷりと震えていたろう。

「それで河埜の気は、済むのか。だが、こっちも感情つてものは、持ち合わせてるんだ」

踵を返して歩き出すセンセイの後を追った。

「怒らないでください。我儘でした」

「怒っちゃいけないさ。娘みたいな年回りの女に、そんな風に思ってもらえるのは、光栄だ」

「また会ってくださいますか」

「誘惑しないんならな」

あたしの言葉は、封印された。

封印されたために出口を失った言葉が、身体の中で膨れていく。仕事場に行けば、センセイの甥が座っている。このまま時間が経てば、彼はセンセイの事務所に入るのだ。

彼と結婚すれば、センセイと不自然なく顔を合わせるのが可能だ。自分の考えにぞっとする。自分のプライドと他人の感情の両方を、ないがしろにしたがるなんて、人間の考えることじゃない。

あたしのその部分は、壊れてしまっているのだろうか。

「真昼ちゃん、これのプランニングしてみる？」

狭小地の二階建て住宅で、施主の希望間取りが記入されている。

「外観の希望はない。こちらのセンスで幾つか提案してくれって」

「あたしのセンスでいいんですか」

「真昼ちゃんだけじゃないけどね。たまには社内コンペしてみるか」

「あたしの案が通れば、設計から監理まで、させていただけますか」
ふむ、と上司は首を傾げ、代表に相談に行った。

「大した自信だな、真昼ちゃん。よし、社内コンペだ。参加したいヤツは参加しろ。入賞者には、金一封五千元也だ」

「安っ！」

「ベテラン勢は、若手に加勢してやってもいいぞ。一般住宅だから、そんなに時間はない。ラフは三日後、間取りと外観の両方。日常業務に支障をきたしたヤツは罰金」

「五千元くらいで、そこまで熱くなりませんよー」

多分、熱くなっていたのはあたしだけだ。

帰りの電車の中で、頭の中に何度も土地の形を思い浮かべた。古い住宅街だとは聞いたので、そこにマッチングさせたい。家に帰って方眼紙を引っ張り出し、貰ってきた土地の形を写し取る。

このコンペで、あたしの立ち居地を掴み取ろう。

センセイの事務所の中に、電話のコールは響いている。報告して励まして貰おうなんて思ったあたしは、やっぱり情けないお嬢さんだ。

いつから、こんなに弱くなってしまったのだらう。河埜真昼は、気まぐれで勝手で、気の強い女だった筈だ。

鏡に拳を突きつけてみせる。進め、真昼。

土俵の上

一般住宅に、凝った間取りは必要ない。住まう人が、いかに効率良く家を使えるか考えるのが、一番必要なことだ。ああでもないこうでもない、線を引っ張る。ユニの鉛筆で黒くなった方眼紙を広げたままベッドに入り、夢の中で完成した図面を見た。久しく持たなかった「熱中する」感覚に高揚して、実際には苦しくなかった二日間だった。期限の前日、フリーハンドでラフを終えたあたしは、夜の十一時にハーフムーンに顔を出した。

「久しぶりにまーちゃんの、その顔を見たな」

「どんな顔？」

「表現のしようがないな。言うなれば、河埜真昼の顔」

あたしは今迄、どんな顔で店に座っていたというのだろう。

「あたし、ずっと、あたしらしくなかった？」

「らしいってというのは、主観だからね。まあ、雰囲気は多少違ったな」

普段あたしは何をしようが頷くだけのマスターが、そんな言葉にするのだから、本当は余程違っているのだろう。携帯電話のフラッシュを開き、馴染んだ電話を呼ぶ。

センセイは、出ない。

翌日の夕方、代表の声で事務所の真ん中に集まったところに、センセイがひよっこりと顔を出した。

「面白そうなんで、来てみたよ」

「いっせーのせっ」で、いくつかのラフが広げられる。

「よし。ひとりひとりプレゼンしてみる。まず、ベテランが手本だ」緊張しているのはやはり、あたしだけだと思う。ベテラン勢の隙の無いプレゼンを見ながら、自分のプランを思う。

「はい、じゃ、真昼ちゃん」

そう言われた時には、喉が渴いていた。

プレゼン中何度も、噛んだと思う。収納は十分だろうか。円形に張り出した居間は凝りすぎたろうか。同じ敷地の中にできる筈の建物に、全員が違うプランを出す。これまで仕事してきた中で、こんなに緊張したことは、ない。社内ですら、こうなのだ。外部との競合プレゼンに参加することは、どんな重圧だろう。

「はいー。じゃ、ディスカッションするぞー」

緊張感のない、間延びした代表の声に、デスクの下で手を握り締めた。

「真昼ちゃんのプランはどうだ？」

「女の人が考えたんだなーって感じ。ただ、先々でバリアフリー化しにくい」

「屋根裏を生活スペースにするとなると、空調の収まりは」

あたしが考えつかなかった欠点が、次々に見える。競うことの面白さを、久しぶりに思い出した。

「じゃ、センセイと密談の上、入賞者を決定するから、ちょっと休憩」

代表の言葉で、自分のデスクに戻って、突っ伏す。自分が駆け出しで、ペーパーであることを実感しただけで、今回の価値はあったと思うしかない。次に集合がかけられた時、あたしは妙に落ち着いていた。これからまだ、覚えていけることがある。前に進むことができるのだ。

「サカグチ・アーキテクツの代表として施主にお薦めするのは、こちらのプランです」

代表が指差したラフは、あたしの提出したものではなかった。あ

たし自身がそれで納得したし、悔しい思いはしたけれども、同じ土俵で勝負させてもらったことに、満足していた。

「俺自身は、真昼ちゃんのプランを手直したい気があったんだけどね。センセイと意見の割れるところだったんだけど、まあ、こちらのほうがそつなく優秀だったことで。だから金一封は、このプランに出ます」

代表はそう言った後、話を続けた。

「ただ、施主側から何通りかと希望があったので、この中から、いくつか選んで施主に提示します」

そこからは、いつもの手順になるのだ。

「真昼ちゃん。木島君がいる間に、一度通して経験を試してみるか」

「あたしが？」

「一人じゃ不安だろう？ 誰かサポートにつけるけど、施主へのプレゼンから、始めてみる」

驚きで呆然とした頭が、突き上げるような喜びに満たされたのは、帰り支度を終えた頃だった。駆け出しが、文字通りに駆け出すのだ。先に進むことができれば、センセイに褒めてもらえる。

あたしの感情はまだ、迷走していた。自分の行き先を決めるのに、他人の賛同が必要なのか。

はったりだらけのプレゼンの後、施主が選んだのはあたしのプランで、ベテランに相談しながら手直しをし、設計を始める。一度動き始めてしまえば熱中する性格そのままに、化粧も忘れた。家に帰ればベッドに倒れこんで、そのまま朝を迎える始末だ。

「真昼ちゃん、そんなに頑張らなくても、時間は足りるから」

そう声を掛けてくれる人たちも、それぞれに自分の案件を抱えているのだ。

時々、酔ってセンセイの事務所に電話をした。代表が突然、あた

しに仕事をまわしたのは、センセイの口添えだったのかも知れない
と思った。センセイが他人の事務所の仕事内容にまで、口を出すよ
うな人間じゃないと気がついたのは、やはり会わなくなってからだ。
自分の変化のすべてを、センセイに結び付けてしまったのは、あ
たしが結び付けたかったからだ。淡く弱い繋がりには、何かの意味を
持たせたかった。自分の感情を表す言葉を封印されたあたしは、出
口を求めて足掻くしかない。

薄ぼんやりとした月

気がつくともまた、桜の季節が廻ってこようとしていた。

「桜でも見に行くか」

センセイの誘いは、そんな言葉だ。江戸時代の大名庭園を岩崎弥太郎が整備し、現在一般公開されているその庭園を、並んで歩いた。「どうだった、現場デビューは」

「とても緊張しました。でも、刺激的でした」

「そうやって、太っていけばいい。そのうちに、自分の出来ることが見えてくるさ」

「でも、今のあたしの仕事は」

「適材適所を考えるのは、坂口の役目だ」

春先の風は、強い。センセイのツイードの上着が煽られ、花びらが舞う。

「見ていてくれる、と仰いましたね」

「業界は、広いようで狭い。噂はどこからでも入る。やりたい事をやればいいんだ」

センセイの傍にいたい。それが、あたしの「やりたいこと」なのだけれど。可能性のある人間が好きだと言ったのは、センセイだっただろうか？

桜の花を受けながら、庭園の中を歩く。

「河埜のデザインは、型に嵌っていなくて、面白い。楽しみだ」

先に進まなくてはならない。センセイに見続けてもらうためには、あたしは上を向かなくてはならないのだ。今の位置に甘んじているわけにはいかない。得るためには、与えられた仕事だけでは不十分に過ぎる。自分のためだけの、仕事を探さなくては。

桜の舞い散る日差しの中、見上げるセンセイの顔は、明るかった。
「河埜と散歩するのも、本当は終わりにしなくちゃいけないんだろ
うな」

「いやです。また誘ってください」

あたしの顔は、悲愴を帯びていたかも知れない。

「何故そんなことを言うんです？」

「俺で満足しちゃあ、ダメだ」

センセイはあたしの気持ちに正確に理解していた。応える気はな
くても。

勤め帰りの道で、ふと空を見上げた。半分の月が薄ぼんやりと浮
かんでいる。あれは、未来のあたしか。それとも、あれこそがセン
セイそのもののなのか。

届かないそれに、手を伸ばしてみる。あたしが欲しいものは、手
に取れない。センセイに引き止めて欲しくても、センセイはあたし
を繋ぎとめようとしていない。

それと前後して、学生時代の友人経由で、耳に入ってきた噂があ
る。日本の企画設計会社が、地中海の方のリゾート地の開発を、ま
るまる請け負ったらしい。かなり大規模な物件であるという。

「そんな仕事、してみたいよなあ。ランドスケープから通しで見ら
れたら、すげえな」

「うん、面白そう。そんなの、一生に一度のチャンスだよな」

返事を返しながら、かなり他人ごとだった。あたしは目先の仕事
で精一杯で、自分の未来さえ薄ぼんやりとした月なのだ。

建築デザインの公募を探しては、片端から自分の中で検討する。
社内では、また元の積算業務に戻りながら、次の機会を窺っていた。
あたしの行きつく先は、どこにあるのだ。行き着く先は、センセ

イ以外のどこにあるというのだろう。

電話は以前よりも、繋がらなくなっていた。あたしとの距離を、徐々に開けていこうとしているのが、わかる。顔が見たくて、とうとう調べてしまったセンセイの事務所の住所を、地図で辿る。そこにセンセイが座っているのだと思うと、居ても立っても居られない夜があつた。

センセイ、あたしを呼んでください。

木島君に、センセイの仕事の度合いをそれとなく確認したりする。

「さあ？叔父さんの家には、滅多に行かないから」

「ダメじゃない、一緒に仕事するんでしょ」

上手く笑えていただろうか。

雨の夜のハーフムーンで、キース・ジャレットのピアノを聴く。
八重桜は終わり、五月の連休の行き先もない。

センセイに、会いたい。

どこに居ても、見ているから

「最近、散歩を一緒にさせていただいてませんね」

「ああ、週末にばかり用事が集中しててな」

多分半分は、あたしを誤魔化すための言葉だ。

「そちらに出向けば、お茶一杯の時間は、いただけますか」

「次の現場は決まったか」

話を逸らされれば、あたしに言えることは何もなくなる。置き去りにされた子供のように、むずかつて泣いて困らせることすら、できない。

若手建築家のワークショップを見つけたのは、インターネットだった。会社には何も言わず、ただ有給だけを申請して参加するつもりだったが、所属する事務所を明記しなくてはならず、結局は会社からの研修という形になった。

「学生アルバイトを入れるか。真昼ちゃんみたいに有能だといいいけどなあ」

「あたしも、戦力として使っていただけなんですか」

「ずいぶん前から、力があるのは知ってたんだけどね。真昼ちゃんには細かい仕事を頼みやすいから、どうしてもそっちの使い勝手を優先しちゃって。悪いとは思ってたんだけどなあ」

「会社での役割分担なら、そちらが優先だと思います。でも、感謝します。ありがとうございます」

飛び立つような喜びを、センセイに聞いて欲しい。

その晩、仕事を終えたあたしは、抑えきれずにセンセイの事務所の前に立っていた。思いの外小さなビルの一室で、まだ室内に灯りが見えた。

ノックすると小さく扉が開き、センセイが顔を出した。

「この場所を、知っていたのか」

こじんまりとした事務所の中は、二人分の机と資料の詰まったスチール棚と、打ち合わせ用だと思われるソファセットだ。まだ光っているモニタと、書き散らしたメモが見える。

「歳だな、何時間もこんなことをしていると、目がしばしばするよ」

ソファを指差し、あたしの向かいに座ったセンセイは、無表情だった。自分の感情の衝くままに訪れてしまったあたしは、後悔し始めていた。

「少しずつ、使っていただけになるようです」

「そうか。良かったな」

沈黙が続き、バッグを握り締めた。

「突然伺って、ご迷惑をお掛けしました。申し訳ありません」

居たたまれずに立ち上がったあたしの腕を、センセイが突然掴んだ。あたしを見る目は、怖いくらいにまっすぐだった。

「河埜、もうここには二度と来るな。俺も、どうして良いかわからん」

「ご迷惑なのは、わかってるんです。自分で、どうしようもないんです」

あたしの前に立つセンセイは、一瞬顔を歪めた。

「頼む。俺は、おまえさんが可愛いんだ。だから俺なんかにかかずにらっっていないでくれ」

言葉の意味を掴み損ねて、センセイの顔を見た。

「俺で満足するな。俺より前へ進め」

あたしの帰着点を、センセイに据えてはいけないのか。

「センセイは、あたしがご迷惑なんですね」

センセイは答えずに、あたしの腕を掴んだまま、ただ苦しげな顔をしただけだった。

抱き竦められて、意味を悟った。愛されている幸福感と、これからもクロスすることのない、あたしとセンセイの行き着く場所。どこにも行きたくはないのに、ここに居ることはできない。

センセイは、あたしにそんなことを望んではいけないのだ。

「せめて、口に出させてください」

「出すな。出しても、何もならない」

センセイの腕の中で、涙を流すこともできず、あたしはただ立っていた。

「河埜がこの道を進む限り、どこに居ても何をしてても、必ず見てる。俺がしてやれるのは、それだけだ」

肩にまわった腕は、力強くて優しくかった。

「センセイの声を聞きながら、進みたいんです」

無駄だとは思いながら、あたしの感情はちつとも言つことを聞かない。

「俺は役不足だ」

「あたしが望んでも、ですか」

「情けないことを言わせるな。俺が河埜を潰してしまいたくない。おまえさんには、もっと広い世界がある」

「あたしは広い世界よりも、センセイに褒められたいんです」

心が悲鳴をあげる。あたしを、センセイに繋ぎとめていて欲しい。それを拒否されたら、どこに向かえばいいのだ。

腕を解いたセンセイは、あたしの顔を覗き込んだ。

「俺のできなかったことをしろ。必ず、見ているから」

センセイの言葉は、やはり苦しそうだった。

「これ以上、してやれることは何もないんだ。俺よりも世界を見る、河埜」

その言葉は、センセイからあたしへの決別の言葉に聞こえた。

発信し続けよう

「もう、会ってはいただけじゃないんですか」

「会わない筈、ないだろう。坂口とは飲み友達だ」

「あたし自身と、です」

センセイはあたしの背を、ぼんぼんと叩いた。

「俺が限界だ。これ以上、言わせないでくれ」

「電話も、いけませんか」

「河埜が揺らがないんなら」

それはとても、難しい。

腕の中に居たくて、このまま時が止まってしまえば良いと思った。

「終電が近い。帰れ」

センセイは、最後まであたしの肌に指を触れなかった。恋の終結は、訪れない。いつの間にか恋に落ちたように、いつかは淡い痛みに変わるのか。

どこに居ても、見ていてやる。それならば、あたしはセンセイに、発信し続ける。

河埜真昼はここにいます。

どんなに遠くなっても、センセイの元に届くよう、「あたし」を発信し続ける。背に回ったセンセイの手は、あたしのものじゃない。でも、あたしが進み続ける限り、センセイはあたしを見ていると言ったのだ。

駅からの帰り道を歩きながら、涙をこぼした。あたしがセンセイに求めていたのは、何だったんだろう。センセイと生活できれば、あたしは満足したのだろうか。自分のマンションへの帰り道にある公園を、泣きながら突っ切った。

見上げれば、空にはくつきりした月が浮かぶ。ジャングルジムによじ登り、月を見上げた。手を、届かせなくてはならない。いつか手が届けば、センセイは喜んでくれるだろうか。

センセイが手に入らないからと歩みを止めれば、あたしとセンセイを繋ぐ僅かな糸まで、切れてしまう。あたしの発信を受け止めさせるために、あたしは前を向かなくてはならない。

目印すらない、その果てに何があるのか。指に触れるよりも強く、あたしをセンセイに焼き付けるために、探り当てたものを叫ぼう。

センセイの声が聞きたい夜に、月を探す習慣がついた。ジャングルジムの上に座って月を見ると、センセイの「必ず見ている」が、耳の奥に聞こえる。電話もいけないとは言われなかったけれど、あたしが揺らがないならと条件はついていた。

揺らがないわけがない。だって、あたしはセンセイが欲しいのだから。センセイの指に触れたいのだから。

ハーフムーンのカウンターに肘をつきながら、コルトレーンの「Say It」を聴く。バーボンにむせた振りで、手のひらに顔を埋めた。あたしが欲しがっているセンセイは、あたしを導く人だ。「俺は役不足だ」と、彼は言った。センセイが求めているあたしは、どんな風なんだろう。

マスターは、何も気がつかない顔をしていた。

若手建築家のためのワークショップに出発したあたしは、若手という括りの中では、事務所の顔になる。二泊三日のワークショップでは、簡単なグループ分けの後、早々に課題が出された。最終日のプレゼンを見据えて、ディスカッションの後に相談しながらプラン図をユニで描く。

「河埜さんって、面白い空間の取り方するよね」

知らない同士が、互いの様子を見ながら実力を求めていく。

世界を見る、河埜。

勤め先の業務の一年分のスキルが習得できそうな、濃密な時間だ。

最終日のプレゼンを終え、批評を加えられた後に、最後の食事をした。

「Fグループでリーダー格だったのは、誰でしたか」

主催者側に声を掛けられ、グループの仲間があたしを指差した。特別にリーダー格だったわけではなく、あたしのラフをベースに、組み立てただけだ。

「面白いデザインだったと、審査員の意見です」

頭を下げると、名刺が差し出された。主催者側の中央に座っていた人だった。

「別に余所の事務所の人に、スカウトを掛けるつもりじゃないので、安心してください」

まだ中年には間がある女の人で、柔らかい笑顔を持っていた。

「チュニジアで、新しくリゾート開発するプロジェクトがあるんです」

「聞いたこと、あります」

「若い方には、ちょっと興味深いでしょう？遊びに来てくだされば、一環をお見せしますよ」

あたしはすいぶん、不審そうな顔をしたかも知れない。

「部外者に、見せていただけののですか」

女の人は、華やかに笑った。

「本当はね、いけないの。私があなたを気に入っただけ。友人として遊びに来て」

「何故？」

「勘、かしらね。勘は良いのよ、私。あなたの名刺もくださる？」
事務所から、名刺は渡されていた。

「サカグチ・アーキテクツの河埜真昼さん。電話するわ」

手の届かない月へ

傷口から血が噴き出そうが、笑っていようが、時間は過ぎて行く。センセイの甥に任せられる部分は渡し、学生アルバイトが決まるまで自分の仕事をこなしながら、施主との打ち合わせにも同行する。身体も頭も忙しいが、心だけがぽつんと取り残されているようだ。センセイに会いたい思いは満ち満ちているのに、出口はどこにもない。

何度か、夜中に電話を鳴らした。一度だけ出てくれたセンセイはいつも通りの低く抑えた声で、あたしの近況だけを聞いた。ワークシOPPでの話をする、一言だけあった。

「何でもいい。盗めるものがあれば、すべて盗め」
ありがとうございます、と電話を切った。声を聞けば、顔が見たくなる。顔を見れば、触れなくなるだろう。

夏に近づいた公園のジャングルジムの上に座り、手を伸ばす。いくら手を伸ばしても、月には届かないのだ。自分が飛び立たない限りは。

あたしは、どこに向かって飛び立てば良いのだろう。公募のコンペに、応募してみた。もちろん事務所のバックアップはあった。けれど、それは通過しないと何の実績にもならない。実力の上には、個性は成り立たない。日常の業務以上に、何かを積み重ねなくては、事務所の中でも新人のままだ。

まったく忘れていた名刺の相手から、連絡が来たのは、梅雨明けの頃だ。

「一段落したから、遊びにいらっしやい。この後は、また忙しくな

るから」

代表にその話をする、他の会社を見るのもまた、大切な勉強だと送り出された。

「真昼ちゃんも学生時代から、他の場所を知らないもんな。エライ人に会って来れば？」

そんな気軽な話だった。

初めて訪れたその会社で、同世代の人間が何人も働いているのを見た。一般住宅や街中のビルではなく、デザイン性の高い建物の模型も見た。開発予定のリゾートのプランを、こっそりと何通りも見せてもらった。現地調査に行っているのも、あたしと同世代が何人も入っていると言う。自分の仕事のスケールとの違いに、ただ呆然とする。あたしの勤め先の仕事は、勿論必要とされているものだし、どちらが可でどちらが不可だということじゃない。種類と用途が違って、建物を扱うという点では、同じだ。

誘ってくれた広村さんが、打ち合わせスペースで紙コップのコーヒを、あたしに勧める。

「本当は、こんなことしてる暇はないの」

ほっとする笑顔を持っている人だ。

「お忙しいのに、ご好意に甘えてしまってます」

「あら、私が呼んだんですもの。頑張ってる女の子、好きなのよ。でも、同性愛的な意味じゃないから安心してね」

「そうは思っていません。あたし、頑張っているように見えますか？」

「あのワークショップの時、目に付く子だなと思ってたの。瞳に力がある。そうしたら、プレゼンで私がイチオシした案件のリーダーだっていうじゃない？嬉しくなっちゃって」

パーティーションから、広村さんよりも少し年上の男の人が顔を出

した。

「チーフ、どこでナンパしてきたんです？」

わけがわからなくて、とりあえず頭を下げた。

「ナンパなんて、人聞きの悪い。プライベートな友達よ」

男の人は、あたしに名刺を差し出しながら言った。

「この人ね、才能のありそうな人を見つける天才だから。カルタゴの港の話、されなかった？」

「残念ながら、今回はそっちじゃないの。彼女は、ちゃんと他の事務所専属。引き抜きなんて倫理にもとることは、しないわよ」

広村さんは笑いながら、ね？と私に同意を求めた。

礼を言って、場を辞した。頭がクラクラしそうな刺激に高揚していたのは確かで、帰宅途中の道で、センセイに電話をした。珍しく夜の早い時間で、センセイは電話を受けた。

「良い体験をしたな。河埜は、井の中の蛙な部分があるから」

「そうですね」

それだけの会話なのに、胸が苦しい。聞いていただいてありがとうございました。うございました、と通話を切った後、目を閉じて唇を噛み締めた。

反復する感情の色

忙しさに取り紛れた日は、まだ救いがある。家に帰って、飲んで眠ってしまえば良いのだ。疲れていれば、朝が来るのは早い。

木島君の教育は順調に進んでいるし、夏休みから入った学生アルバイトは、雑用くらいは片付けてくれる。建築確認表示板に自分の名前が書き出され、自分の現場だと認識することによって、仕事にハリが出たのは確かだ。

「まーちゃん、最近ご無沙汰気味だね」

ハーフムーンのマスターが、ナッツを皿に載せながら言う。

「うん。今は自分のできることを増やすのに、手一杯」

「ああ。そういう時期は、あったほうがいいね」

頬杖をついて、目を閉じる。ポケットの中の携帯電話は、出すと苦しくなるから。

夜の道を歩きながら、月の方向を探した。カーゴパンツのサイドポケットには、携帯電話がある。無言で存在を主張するような、それに手を伸ばさないよう、公園に差し掛かったあたしは、走り出した。

身体の内側のバーボンに息が切れ、苦しくて涙が出た。センセイ、あたしはまだ、飛び立てていませんか。センセイの重力は、あたしを留めているようです。

もう二度とセンセイの顔を見ることは、できなくなってしまったら。仕事のやり取りや代表との約束のために、今の職場に顔を出すセンセイを、覗き見ることができなくなったら。

センセイと少しでも繋がりのある場所ならば、触れてもらうことはできなくとも、あたしだけがセンセイを見ていることはできる。

何を乞うているのか、自分でもわからない。

ああ、センセイにあたしを、これでもかと焼き付けたい。焼き付けるためにすることは、センセイではなく、他の場所を見ることがだとわかつているのに、あたしにはそれが苦しい。

そんな風に夏の間中、感情の反復を繰り返した。まったく薄くならない痛みにうんざりしながらも、社内では自分の立ち居地が確定し始めた。

センセイは相変わらず代表と会うために夕方遅くに顔を出す。顔を見れば、やはり求めてしまうのだ。

夜の公園のジャングルジムの上で、立ち上がってみる。僅かも近くならない月に、指を向ける。それでも泡立った気持ちの納まらない日は、そのまま走り出すことがあった。振り切れるものなら、振り切ってしまいたくて。

「ルイ、戻れ！」

後ろから聞こえた少年の声と、獣の息遣いに驚いて、振り返った。突然走り出したあたしを追った犬のリードを、飼い主が離してしまっただけ。

戸惑った顔の飼い主は、高校生のようだ。

「誰かがいると思わなかった。ごめんね、犬君もびっくりしたね」

こんな暗い中に散歩をするなんて、少年も憂鬱なことがあったのだろうか。

首を撫でると、犬は唸れた声で「わふっ」と、あたしに話しかけた。名前がルイで唸れ声の持ち主を、あたしは人間で知っている。

「あはは。ルイって名前、もしかしたらサッチモ？」

ルイのリードを持ったまま、公園を一周走ってみる。飼い犬は、

暢気で平和で穏やかだ。心配そうに後ろから走ってきた飼い主に、リードを返して礼を言った。

「ルイのご主人、お名前は？」

「初崎伊織。おねーさんは？」

「真昼。またね、伊織」

大人にはまだ間がある少年には、これからいくつも可能性があるだろう。高校生に戻りたいと思ったことはなくても、選択肢が多いことが、羨ましい。

可能性のあるヤツが好きだと言ったセンセイから見たあたしも、そんな風だったのかも知れない。

代替の電話先

気がつくと二十七歳で、センセイに会ってから、二年も経ってしまっていた。施工会社との打ち合わせを終えて帰宅する途中、制服の男の子が目飛び込んできた。強いくせに人懐こそうな表情に、見覚えがあった。

「子供がこんな時間に制服でウロウロしてちゃダメだよ、伊織」
きょとんとした顔であたしの顔を眺め、公園で、と確認するのがおかしかった。

ハーフムーンには行こうと思っていたけれども、本気で誘ったわけじゃない。

「制服でそんなところに行ったら、補導されます」

まっとうな家で育った良い子なのだろう。素直な反応に、何かがほっこりと暖かい。仕事への焦りとセンセイへの行き止まりの感情は、自分自身を追い詰めて、どこかに癒しを求めていたのか。

学生時代の友人とのバカ騒ぎに飛び込んでいくには、あたしはいぶん疲れていた。卒業してから何年も経って、皆それぞれに仕事を持っていたり、家庭を持っていて、他人の鬱屈に付き合うほどヒマじゃない時期でもある。

今時珍しい、餅まきのある上棟式に参加し、それを肴に会社の人間と酒を飲んだ帰り道、伊織に会った。多分あたしが誘ってハーフムーンに連れて行ったのだが、よく覚えていない。隣に人がいれば、センセイに電話しなくて済む。あたしをよく知っているマスターでは、抑止力にはならない。自分自身を取り戻したフリをするために、知らない人間が必要だった。

何度かハーフムーンで落ち合い、酒の飲み方を教えた。高校生に

不道德な、と言われるだろう。あたしより世間知らずな伊織が可愛くて、言いなりになる子供っぽさが愛しい。センセイに届かない手を、どこに伸ばすのか模索して足掻いている情けないあたしは、伊織から見れば大人なのだ。

満月の夜、センセイに電話する指を止め、伊織を呼び出した。この子は、何故あたしの求めるがままに動くのだろう。そう考えて、伊織の視線に気がつく。

「伊織、あたしに会えて嬉しい？」

「真昼さんが一方的に呼び出すんじゃない」

「でも、嬉しいでしょ？」

あたしは、伊織の気持ちをセンセイに置き換えた。それが酷いとだと理解しながら、世間知らずの少年に、キスした。

「ハーフムーンにいるから、おいでえ」

センセイに電話したくなるたび、自分を卑怯だと罵りながら、伊織に電話する。まっとうに育った高校生が、来るとは思っていないかった。

「そろそろ閉めるよ、まーちゃん」

「もう一杯だけ、飲ませて」

そんなやりとりの最中に、息を切らした伊織が現れた時、マスター以上にあたしが驚いた。平静を装って、マスターと会話する。

「来たわね、伊織。マスター、この子にも一杯」

「もうダメ。まーちゃんも帰りなさい」

「ケチ。じゃ、マスターが下に隠してるブッカーズ、味見させてくれれば帰る」

自転車の後ろで揺られながら、もういけないと思った。あたしの感情に、この子を巻き込んだじゃいけない。伊織はいつの間にか、まっすぐにあたしに感情を見せるようになっていた。

広村さんから連絡があったのは、そんな時だ。

「お久しぶり、河埜さん。頑張ってる？」

「ぼちぼちと。そろそろ、現地入りですか？」

「それは来春になるの。今はまだ、現地調査組の報告を受けて、手直しの真っ最中。人手がいくらあっても足りないくらい、忙しくてねえ」

広村さんの会社の、生き生きと働いている同年代の人間たちは、睡眠時間を削っているだろうか。あたしの中途半端な忙しさよりも、もっと私生活に費やす時間は、短いに違いない。

「羨ましいですね」

スケールの大きな仕事が、というより、自分にかかずらう暇のない状態が、羨ましい。

「あら？河埜さんはワーカホリック？私もよ」

あははと笑う広村さんは、利害関係のない相手と、仕事の話がしたいのだと笑った。

「私の年だと学生時代の友達は、みんな子育てしながら働いてて。独り者は気楽でいいわね、とか言われちゃうのよねえ。社内で仕事の話だと、熱くなっちゃって雑談にならないし」

「何年か後のあたしも、そうなるでしょうか」

「家庭より仕事を優先しそうなタイプよね、あなたも」

広村さんは本当に、ただ雑談をするために電話してきたらしい。あのプロジェクトに、何人のチーフ・デザイナーがいるのかは知らないけれど、それなりの地位と責任のある人だというのは、理解できる。まだ片手にも満たない自分の物件を、思い浮かべてみる。自分の頭の中に描いたものが形になってゆく快感を、広村さんはもっと深く味わっているのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838w/>

ボージャー

2011年10月26日10時11分発行